

死後存続研究が示す「死後の世界」と「心的現実」の問題について

坂井祐円

SAKAI Yūen

1. 死後存続研究の方法論とその矛盾

死後存続研究とは、肉体が機能停止して死を迎えたとしても、意識は何らかの形で残存し継続する可能性を経験科学的に検証しようとする研究の総称を指す。もともとは19世紀の後半に、イギリスを中心に流行したスピリチュアリズム（心霊主義）を背景として盛んに行われた霊媒現象を対象にした研究を発端とする。¹ 霊媒による心霊科学研究は、やがてESP（Extra-Sensory Perception／超感覚的知覚）研究、超心理学研究へと派生していったが、20世紀の後半になると他のいくつかのアプローチが開発された。これには大まかに二つの流れがあり、一つは臨死体験の研究、もう一つは生まれ変わりに関する研究である。²

いずれにせよ、意識が死後も存続するという発想は、「意識は脳の副産物である」とする近代の自然科学が示してきた唯物論的仮説へのアンチテーゼであり、近代科学主義パラダイムの否定ないしは転換を要求している。それゆえ、科学的思考を常識とす

1. 三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史—心霊研究から超心理学へ』講談社、2008年。

2. 大門正幸『なぜ人は生まれ、そして死ぬのか』宝島社、2015年。大門正幸「意識の死後存続研究の新たな展開」『人体科学』24(1)、75頁～77頁、2015年。

る多くの現代人（とりわけ研究者の立場）からすれば、この研究自体をオカルトの類と見做して、学問的な議論に値しない「いかがわしきもの」と考えるのも無理からぬことである。

とはいえ、意識と脳の間接関係を考えるという点だけを見れば、これは哲学の歴史において古くから議論されてきた身心問題の中心テーマであり、取り立てて奇妙なことではない。死後存続研究が近代科学主義と本質的に相容れないのは、いわゆる「あの世」もしくは「死後の世界」の客観的な実在を前提としている点にある。しかも、その具体的な描写や世界構造までもが含まれている。このことを容認するためには、私たちが当たり前のように感じ取っている世界の見方を一変しなければならないほどの価値転換を迫られるだろう。死後存続研究が明らかにする「死後の世界」は、日常感覚からするとそれくらい奇妙なことである。一例として、ここでは「中間生記憶」という現象について見てみることにしよう。

中間生記憶とは、人が転生をくり返す中で、一つの人生が終わり次の人生へと移行するまでのあいだを過ごすその中間の世界（死後の世界）についての記憶である。これは前世療法において、退行催眠によって

トランス状態に入ったクライアントが過去の生の記憶を語る際に、一つの人生が終わり死んだ後に入っていき世界のヴィジョンとして出てくる。³ しかも中間生記憶が語られる場合には、トランス状態に入っている本人の人格とは異なる、ガイドもしくはマスターと呼ばれる精神的に進化した霊的存在が突如として出現し、本人の人格とは別に語り出すという形を取ることが多い。この中間生の内容は、19世紀の心霊科学研究に照らし合わせると、霊媒を通して現れた高級霊なる存在が語る霊界の内容と酷似しており、ガイドやマスターというのは霊的成長のための手助けをする守護霊 (guardian spirit) もしくは守護天使 (guardian angel) と呼ばれる存在に近い。また、前世記憶や胎内記憶を語る子どもが、この世に生まれてくる直前に過ごしていた場所について言及することがあり、その中で導き手のような存在を示唆するような発言もあるが、これも中間生のヴィジョンとよく似ている。あるいは、臨死体験の事例では、死後の原風景と感じられる平安な光景を目の当たりにするという報告が多いわけであるが、ここでは神々しく光に包まれた存在に遭遇して何らかの示唆が与えられるという展開がしばしばある。これもまた見方によっては中間生記憶が語る内容と似通っていると言える。このように死後存続研究が伝える「死後の世界」の様相は、アプローチや対象の違いはあっても、ある程度の共通性をもった特徴が見出されるのである。

3. 前世療法の最中に、中間生記憶を語るクライアントは多いようである。前世療法を紹介する本の中でも比較的内容がまとまっているものとして、ブライアン・ワイス (山川紘矢・山川亜希子訳) 『前世療法—米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』PHP 研究所、1991年がある。

では、こうした死後の世界の実在性は、科学的な方法を用いて客観的に証明できているのかと言えば、そうとは言い切れないように思う。その最大の理由は、物質的な根拠が全く見つからないことにある。死後存続研究が明らかにする死後の世界には、具体的で実感を伴った描写が多く含まれている。臨死体験者の中には「そこで見た光景は普段の日常感覚よりも何十倍もリアリティの感覚が強かった」と報告する者も少なくない。とはいえ、彼らが見てきたとされる死後の世界の様相は、あくまでも個人の心の内側において起きたイメージ体験なのであって、客観的に実在するとは言い難いように思う。インターネットのように、何らかの媒体装置を用いてその場所にアクセスすることが誰にでも可能ということであれば、死後の世界を客観的な実在として容認することもできるだろう。ところが、死後の世界にアクセスする (体験する) 方法は、退行催眠によるトランス状態であったり、臨死状態であったりと、非日常的で特殊な状況においてであり、しかも必ず一人の人間の内面にいて主観的に体験されているものである。そこでは体験を共有する者もおらず、物的証拠も何もないので、その体験がリアルなものだといくら訴えても、周囲の者からすれば当人の性格や状況からその発言に信憑性があるかどうかを判断するのみである。

このことは法廷をモデルに喩えてみるとわかりやすくなるかもしれない。被告人に見立てられるのは、死後の世界を見てきたと語る臨死体験者や退行催眠で前世記憶が蘇ったと語る証言者である。彼らを擁護する死後存続の肯定派の研究者はさながら弁護士であり、これに対し、脳神経科学などの知見をもとに低酸素状態で見た幻覚にち

がないとか、虚偽記憶の植え付けかセラピストの意図的な誘導だろうなどと反論する否定派の研究者は、まるで検察官のようである。結局のところ、そこでのやりとりは、体験者や証言者らの語りの事実性をめぐっての証拠探しとその反証のくり返しである。決定的に違うのは裁判官がいないことで、そのために判決（判定）が出ないままこの対立は平行線をたどることになる。

要するにこれは、死後存続研究の方法論が、相変わらず従来の近代科学主義の唯物論パラダイムに則っており、その範疇を出ることがないからこそその必然的な齟齬なのである。死後の世界や霊魂といった存在は、そもそも物質世界には還元できない領域の問題と言っていい。にもかかわらず、物質科学の方法に準拠して何とかその存在を論証しようと躍起になることは、論理矛盾でしかなく、結果的には徒労に終わるほかないのである。

2. 「在る」とはどういう事態か

打開の方策があるとすれば、思考法自体を全く別の方向に転回させるほかない。すなわち、物質世界とは異なる次元として、心や意識という領域を考えることである。死後の世界や霊魂などは、そうした思考法の延長において把握すべき事象ではないだろうか。そのためには、さらに哲学的思考の原点へと遡及していく必要があるだろう。具体的には、そもそも何か「在る」とはどういう事態なのか、「現実」とは何を指すのか、「経験」とは何か、といった古くて新しい問いを掘り起こしていく作業であり、哲学の方法論的な用語で言えば「現象学的還元（エポケー）」のことである。

今ここにおいて、私が感覚している世界——パソコンの画面、叩いているキーボー

ド、座っている椅子、呼吸している身体、窓の外に見える景色、聞こえてくる作業用のBGM……。私はこれらの感覚する事象について、すべてが「在る」と思って疑うことはない。なぜ「在る」のかはすぐにでも実感できる。目を閉じて耳を塞いでみてから数秒後に、再び目を開けて耳を傾けてみればいい。外の景色や音楽に多少の動きはあるが、ほとんど何も変わっていない。外界には「在る」ことに関して恒常性や一貫性がある。そして、このことが「現実」の確かさ、根拠になっている。一方、こうした外的な現実とは異なりながらも同時並行的に起きている、もう一つの現実がある。内面世界、心の中の現実である。何か作業しながら、心の中では様々な思考や感情が動いている。様々なイメージも湧き起こっている。そうした心の中の出来事は、外界の現実の確かさに比べると、変化が早く一定ではない。さきほど考えていたことが過ぎ去ると、今はもう別のことを考えている。また、外界の刺激に触発されて、気持ちが変化することも少なくない。さらに言えば、自分の心の中の動きを確認できるのは、自分自身だけである。こうした心の中の動きや変化を外的な事物と同様に「在る」と表現するには無理がある。実在的な根拠が見出せないからである。心の中で起きている現実とは、どこまでも不確実で不安定であり、実在であるとは考えにくい。現実と呼べるものには外的現実と心的現実の二つがあることは認められるとしても、その性質を比べてみれば違いは一目瞭然である。外的現実こそが実在であり、心的現実はこれに付随する副次的なものと考えるのは、こうした経験的事実に基づいている。

ところが、存在や現実とは何かを考える上で、この素朴実在論を覆す現象学的に

重要な局面がある。デカルトの思考法であった「方法的懐疑」によって見出された存在の起点としての「コギト（考える私）」。

ならびに、カントによって洞察された認識の「コペルニクス的転回」とそれによって見出される「超越論的主観性」である。それはすなわち、対象の事物が客観的に実在するから人間の認識が可能になるとする素朴実在論の考え方を全く翻転させて、対象の事物はそのまま実在するのではなく、認識主観によって構成されることによって初めてその存在が可能になるとする見方の転換である。そして、この対象世界を構成する超自然的原理としての主観のはたらきが超越論的主観性（純粹自我）と呼ばれる。対象世界はひとまず在るとしても、その在るといえるのは、この「私が」在ると認識していなければ、成り立たない。その意味ですべての存在の起点となるのは、私の認識主観である。この認識転換の考え方は、よくよく考えてみると、かなり衝撃的なことを伝えている。私たちが当たり前のよう存在していると思込んでいる外的な物質世界は、内的な主観の世界、つまりは心の世界によって生み出されるのであり、いわば、心が物質に先立って存在する、ということになるからである。⁴

このような唯心論的な思考傾向は、ネオ・プラトニズムの創始者とされるギリシャの神秘家プロティノスの万物流出説（emanatio）を思い起こさせる。無限にして真の実在である「ト・ヘン（一なるもの）」

4. ただし、カントのいう不可知の「物自体（Ding an sich）」の概念を物質世界の実在性の示唆であると考えるかどうかは解釈が分かれるところである。なお、世界の存在と自己との関係についての現象学的考察として、新田義弘・河本英夫『自己意識の現象学—生命と知をめぐる』世界思想社、2005年がある。

が自身を顧みるという思惟の働きによって「ヌース（知性）」が流出し、ここから「プシュケー（魂）」が流れ出て、プシュケー（魂）が観る（主観）という働きにおいて、観られるもの（客観）としての「物質」が流れ出てくる。これによって世界が成立することになるという説である。ト・ヘンとは、有限にして仮象なる存在としての万物（魂と物質）とは異なり、「神（デミウルゴス）」（プラトンのいう「最高善のイデア」）に等しい。そのため、ト・ヘン自体は流出によって変化したり増減したりすることはない。あたかも太陽自身は変化せず、太陽から出た光が周囲を照らすようなもので、光から遠ざかれば次第に暗くなるように、流れ出た魂や物質には高低や善悪の差別が生まれるのだという。⁵

グノーシス主義やヘルメス主義などの西洋の異端的な密儀信仰の系譜は、おおよそのプロティノスの流出説と深い関わりをもつ。また、初期キリスト教神学者のアウグスティヌスもプロティノスの思想に傾倒したという。ペーメヤエックハルトなどの中世ドイツの神秘主義、さらに18世紀の神秘思想家スエーデンボルクや19世紀末に起こった神智学運動にも多大な影響を及ぼしており、西洋神秘思想の原点でもある。プロティノス自身は、流出を逆にたどり、忘我状態となってト・ヘンに没入するという神秘体験（エクスタシス）に何度も達したと伝わっているが、こうした体験は、現代の臨死体験にも通じるように見えるし、またイスラム神秘主義（スーフィズム）や古代インドのヴェーダーンダ哲学との類似を彷彿とさせる。

5. 水地宗明他編『新プラトン主義を学ぶ人のために』世界思想社、2014年の中、第3章「プロティノス」を参照。

3. 心的現実の実在性

さて、「在る」とはどういうことか、「現実」とは何なのかを考えるために、現象学的還元から純粹自我の発見、そして西洋の神秘主義との関連について見てきたわけであるが、それでもやはり物質的現実が確固として存在するという世界観から心的現実こそが実在であるとする世界観へとパラダイムシフトするには、理屈はわかるとしても、実感としてはまだまだ納得しがたいものがある。

そこで、今度は視点を少し変えて、20世紀前半の現象学派の興隆と時期を同じくして展開した、C. G. ユングを創始とする深層心理学の見解に注目してみたい。ユングは、物質的世界の実在性や独立性の意義を十分に認めながらも、同時に人間の内面世界である心的現実もまた、外的な物質世界と同じように、実在性や独立性を認めるべきとする見方を示している。つまりは、現実にはひとまず物質的現実と心的現実の二つの領域がある、という前提から出発するのである。その上で、両者にはしばしば相互的に交差する現象が発生することにユングは注目し、この現象を共時性 (synchronicity) と名付けて、一つの研究分野を切り開いている。また、こうした前提から物質世界と心の世界には共通する基盤が存在し、これらを統合的に生成させる機序としての類心 (psychoid) という仮説も提起している。⁶

周知のように、ユングの深層心理学は、集合的無意識 (collective unconsciousness) の概念を根幹に据えているが、このことは心的現実 (psychic reality) の世界が超個体

6. ユングの心的現実についての理論とポストユングの考察については、菅原浩「心的現実と想像界をめぐって—世界空間論への歩み—」『人体科学』10(1), 1頁～10頁、2001年を参照した。

的な実在性を保持しており、個人の感覚には収まり切らないことを示唆している。もともと心的現実という概念は、S. フロイトの神経症研究の初期において提唱されたものである。フロイトのもとに来談してくる女性クライアントの多くが幼児期に成人から性的誘惑や虐待を受けたと語ることから、そうしたトラウマが神経症の重要な病因と捉えていたところ、やがてクライアントの内的欲動から出てきた空想であり作話であったことがわかってくる。しかし、この空想は無意識の精神過程からすれば、外的世界の現実以上に重要な機能を担っている。つまり、内面的で主観的な出来事こそが、むしろ神経症を実際に引き起こしてしまうのであり、こうした心の構造に注目して、フロイトは心的現実と呼んだのである。このようにフロイトのいう心的現実というのは、心の中で作られる虚構の物語を指しており、外的な現実に影響を及ぼすエネルギーであるとしても、それが実在であるとは考えられていなかったのである。ところがユングは、フロイトとはまったく異なる観点から心的現実に関心を向けたのである。それはつまり、イメージという心的現実がもつ固有のはたらきへの洞察である。イメージは、元型 (archetype) という自律性をもった潜勢態が発現することにより、生み出される。そして元型は、おおよそ「影」「アニマ」「アニムス」「グレートマザー」「老賢者」といった、人格化された姿をもって現れてくる。イメージ体験の背後には、必ず何らかの元型が二重写しのように潜んでいるのであり、しかも、夢や神話や伝説などのように、個人を超え、さらに時代や地域をも超えて、普遍的に顕現するのが元型の特徴である。したがって、心的現実とは、元型に彩られたイメージによって構成されて

いるからこそ、固有の世界なのであり、物質的現実とは性質が異なっているとはいえ、ここにも独自の实在性や独立性があると認めざるを得ないわけである。

ユングの心的現実についての見方は、ポストユングアンに至ると、さらに唯心論的な傾向を強めていく。物質的現実が仮象であり副次的であって、心的現実のほうが一次的であり優位であるとする世界理解に立ち、ネオ・プラトニズムへと傾斜していくのである。このことは、とりわけ元型派と呼ばれるジェームズ・ヒルマンの「魂の地平」や、アーノルド・ミンデルの「ドリーム・ボディ」などの考察に顕著に見られる。彼らの考察が極めて特徴的と言えるのは、心的現実の深層には、「身体性を伴ったイマジナルな世界空間が存在している」という主張による。この発想は、日常的感觉からすると、まったく異文化世界に連れてこられたようなショッキングな印象を受ける。とはいえ、卑近な例として、深層心理学がしばしば取り上げる「夢」をもとに考えてみると、少しは理解が可能になるだろう。夢は、私たちの誰もが経験している心的現実の代表的なものであるが、夢の中に出てくる出来事は、意図的に想像して作り出したわけではなく、気がつくと、いつのまにかその場面の中において、出来事が起こっているわけである。また、夢の中には、様々な人物や生き物たちが現れるが、これも大抵は、意図的に現れるように仕向けたわけではなく、なぜか現れているわけである。そして、その人物たちには、人格があり会話も成立したりしている。こちら側では、様々な感情や思考が起こってくるし、接触することがあれば、肌の感覚や臭覚、味覚がはたらいたり、ときには痛みを感じたりすることさえある。当然、視覚や聴覚はすでに

はたらいっている。つまり、夢の中でも、身体感覚がしっかりと機能しているわけである。ということは、心的現実においても、物質的現実において身体を持っているのと同様に、何らかの身体性（いわゆるイマジナル・ボディ）を帯びていると考えることができるのではないか。しかも、そうしたイマジナル・ボディが生きてはたらく自律性や独立性をもった世界空間が存在していることにはならないだろうか。こうした仮説は、夢とは脳内での記憶情報の処理過程にすぎないと説明する脳神経科学の立場から見れば、いくらでも反論ができそうである。とはいえ、この心的現実のもつ世界空間や身体性は、明晰夢⁷や瞑想における変性意識状態などの事例を鑑みても、現象的には認めざるを得ないものがある。ただし、これらの事例もまたあくまで体験者の証言を根拠にしているものであり、死後存続研究の成果と同じく、客観性を主張できるとしても結局は経験科学的にしか実証できないものではある。

しかしながら、話は振り出しに戻るわけでは決してない。ここで確認したいことは、思想的に突き詰めていくことによって、近代科学主義の唯物論的パラダイムが決して堅固な理論基盤の上に成り立っているわけではなく、その反面、心的現実の实在性は、物質的現実と同等もしくはそれ以上に真実味を帯びている、という点に尽きる。そして、だからこそ、こうした心的現実論の立場から「死後の世界」とか「あの世」といった

7. 明晰夢の実験的検討や考察については、現象学の立場から心理学研究を進める渡辺恒夫の次のような論文が参考になる。「明晰夢：実験的検討と心理的条件」『国際生命科学会誌』21(1), 159頁～65頁、2003年、「夢、明晰夢、死、転生—世界という夢から覚めるために」『現代思想』32(1), 214頁～27頁、2004年。

事象について捉え直してみると、科学的な検証とは異なった意義を探ることができると思うのである。

4. 死後の世界でのからだの修復

以上の考察を踏まえて、ここからは具体的な事例をもとに「死後の世界」という心的現実の深層に分け入ってみようと思う。

ここで取り上げるのは、イラク戦争の最中にアメリカ陸軍の民間技術者として戦地に入っていたナタリー・サドマンという女性の臨死体験の事例である。⁸ ある日、アメリカ兵たちと一緒に武装車両に乗って、イラクでも危険地帯とされている地域に出かけたときだった。走っていると、突然に何かの爆撃が襲った。何が起こったのか考える間もなく、気がつくと次の瞬間に、異次元のような世界にいたという。

ナタリーさんは、広い会議場のようなところに立っていた。そこには、人のように感じるが肉体のない意識体がたくさん集まっていた。彼らはナタリーさんの処遇をどうするのかを討議していた。そこでのコミュニケーションは、すべてテレパシーで行われていた。討議では、ナタリーさんのこれまでの人生における様々な能力が検討材料として審査にかけられていた。結果、ナタリーさんには地上でまだ果たすべき役割があるということになり、肉体に戻されることになった。その時、ナタリーさんはここが天上の世界であることに気づく。見下ろすと現実の世界があり、そこに半壊状態になった武装車両が見えた。その中に、顔面が血だらけで、目には穴が開き、腕が折れ曲がって、壊れた人形のような姿の女性

8. 出典は、エリコ・ロウ『死んだ後には続きがあるのか—臨死体験と意識の科学の最前線』扶桑社・2016年、65頁～70頁。

がいた。ナタリーさんは、それが現実の自分の姿であることに気づき、生き返されると聞いて、あんなになった肉体に戻ったら、この先大変な苦勞が待っていると思い、「地上には戻りたくありません」と会議場に集まった意識体に訴えたという。そこで、さらに討議が続けられることになり、それならば、壊れた肉体の一部を「修復」した上で地上に戻すという条件はどうかと交渉され、ナタリーさんは生き返ることに同意した。

次の瞬間、会議場は消え、ナタリーさんは別の次元に移っていた。そこは、人の肉体の損傷を修復するところだった。ただし、病院というよりも修理工場のような雰囲気だったという。何人かの意識体と一緒に、ナタリーさん自身も手伝い、爆破で瀕死の重傷を負った肉体の修復作業が始まった。それは現実の世界で行われる外科手術とはまったく異なるものだった。まずそのからだはホログラフィーのようで、からだの基盤は網の目の光のようなものになっていて、光を操作すると、それが現実の肉体に反映されて、壊れたからだの機能が修復されていく仕組みになっていた。ナタリーさんは、数人の意識体とともに作業しながら、彼女自身の肉体の不具合に関するきわどい冗談をかわしたのを覚えているという。

からだの修復が終わった途端、ナタリーさんの意識は、瞬時にまた別の次元に移された。今度は宇宙ロケットの発射場のようなところにおいて、そこから彼女は地上の自分のからだめがけて、弾丸のように発射された。強い衝撃とともに、現実の世界に着地したかと思うと、耐え難い激痛を感じて、意識が戻った。あたりを見回すと、ナタリーさんは半壊状態の武装車両の中において、同乗していた兵士たちが血まみれで倒れて

いるのが見えた。ナタリーさん自身は片方の目しか見えず、からだは自力で動かなかった。やがて援軍が来てナタリーさんや生き残った兵士たちは無事救出され、数か月の入院治療とリハビリの末、障害を抱えながらも自力で生活できるまでに回復した。

興味深いことに、重篤な状態を脱した後でも、ナタリーさんはしばらくの間、意識を向けるだけで天上の世界に自由に行くことができ、そこにいる意識体とコミュニケーションができたという。しかし、あの世とこの世を頻繁に行き来するのは本人のためにならないとして、向こうから交流を断たれたようである。その後、この臨死体験の影響によって、ナタリーさんにはアートの才能と、手から微細なエネルギーを出すヒーリング能力が開花したという。そのため、現在では、アリゾナ州で絵を描きながら、スピリチュアル・カウンセラーとして悩める人々の癒しの導き手になっているとのことである。

この事例は、アメリカ在住の日本人ジャーナリストのエリコ・ロウ氏が、直接本人に電話取材することで聴き取りをした臨死体験の記録である。しばしば報告される臨死体験では、暗いトンネルをくぐっていく、心地よく穏やかで光に満たされた世界に入る、すでに亡くなった親族や光の存在に出会う、などといったいくつかの共通要素があるわけであるが、この事例では、そうした共通要素がほとんど見られず、むしろSF映画さながらのドラマチックな展開であり、稀有で奇妙な臨死体験の内容として注目を集めている。

この体験をどのように解釈したらよいのだろうか。一つには、臨死体験というよりも夢を見ていた状態に近いのではないかと、という見方があるだろう。夢の中であれば、

どれほど荒唐無稽な出来事であっても可能性としては起こり得るので、臨死体験のパターンから逸脱していてもおかしくはない。この体験者が語った「会議場のようなところで複数の意識体によって死者の魂の処遇について討議する」といった場面は、退行催眠で中間生記憶を蘇らせたときに語られた内容の中に類似のものを見出すことができる。アメリカの熟練した催眠療法士の一人であるマイケル・ニュートン（故人）は、中間生のことをスピリット世界と呼び、魂が死後に行く異空間であり、魂が住む世界と捉えているが、彼のもとに来談するクライアントたちが催眠状態の中で語るスピリット世界の記憶によると、長老（Elder）とか賢者（Sage）と呼ばれる霊的に高次元の存在が複数現われ、死んだばかりの魂の過去生の行いについて審問する評議会のような会合が開かれるのだという。⁹ まるでインド由来の閻魔大王の審判のようにも見えるが、この評議会というのは、罪を裁かれ懲罰を受けるような場ではなく、過去生を振り返り、次の未来世の計画を立てることが目的なのだという。そしてまた、ここでもやはり死者の魂と長老たちとはテレパシーで交流しており、言葉を介さずに思いが伝わる点は共通している。臨死体験と退行催眠では心的現実の性質が異なっているように見えるが、評議会（会議場）や複数の高次元意識体が出現して、死者の魂の生前の行為や処遇などを評価し審議するという共通した展開を考えると、これらは元型的であると言えるだろう。

9. Newton, Michael (2000): *Destiny of Souls: New Case Studies of Life Between Lives*. Woodbury, Llewellyn Worldwide Ltd., pp. 201–51. (澤西康史訳『死後の世界を知ると人生は深く癒される』パンローリング、2014年)。

さて、ナタリー・サドマンの臨死体験において、最も重要なテーマとなっているのは「修復」であることは間違いないだろう。もちろん、それは爆破によって激しく損傷した肉体の修復をひとまずは指しているのだが、さらに深く考えるならば、この臨死体験自体が人生そのものの修復を意味してはいないだろうか。ここでは、からだの修復が行われるときには、肉体がホログラフィーのようになっていて光を操作することで進められる、というヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）のような描写があるが、このことは、意識のほうが肉体よりも優位であり、むしろ肉体とは本来は実体のないもの、仮象なものにすぎない、ということ伝えてあるかのようなのである。そして、からだの修復を終え、地上の世界に戻ってくると、彼女の人生が一変するという展開が待っている。障害を抱えながらの生活になったとはいえ、アートの才能の開花とヒーリング能力の目覚めによって、「傷ついた癒し手」¹⁰としての第二の人生を歩み始めるのである。まさしく戦地での臨死体験が、彼女の人生を修復し、新たなものへと再生させていったのである。

もちろんこの事例に限ったことではなく、臨死体験を通してその人の生き方そのものが大きく変容するという展開については、以前から数多くの研究報告がなされている。このことに注目していくと、結局のところ、「死後の世界」を探究するということは、なぜ人生において、臨死体験のように死後の

10. 「傷ついた癒し手 (wounded healer)」は、ポストユンギアンの一人グッケンビュール＝クレイクによって、心的現実の元型として考察され提起された概念である。この問題については拙論「傷ついた癒し手としての法蔵菩薩」(西平直・中川吉晴編『ケアの根源を求めて』第3章)で考察している。

世界を垣間見るような特殊な体験が起こり得るのか、その意義を掘り起こすことこそが、本当に問われていることなのではないかと思われるのである。こうした視点から考えると、この事例のもつ「修復」というテーマは、ユング心理学の用語で言えば、死と再生のダイナミズムをともなった「個性化過程 (Individuation)」の劇的なパターンであり、W. ジェイムズの「二度生まれ」、禅語の「大死一番、絶後再び蘇る」などの言葉に示されるような、人生最大の変容体験をドラスティックに象徴する出来事であることに気づくのである。

5. 破損した仏像の夢

ここで「修復」というテーマから、もう一つ印象的な事例を紹介したいと思う。これは京都・愛宕念仏寺の住職で、仏像修理師であった西村公朝師が語っていた夢の話である。¹¹ 東京美術学校で彫刻を学んでいた時期に、法隆寺夢殿の救世観音に出遇って感激し、仏師になることを決意。卒業後は、三十三間堂の十一面千手観音千体像の修理に参加していたのであるが、昭和17年(1942年)、27歳のときに戦争に召集され、日本軍の兵士として中国各地を転戦することになった。それはちょうど武漢から長沙へと向かう夜行軍に加わっていたときのことである。極度の疲労から、歩きながら眠っているような状態になった。その間に次のような夢を見たという。

私の右側に、破損した仏像が何百何千と、実に悲しそうな表情で一列に立ち並んでいます。その前を私は歩きながら、その一体

11. 西村公朝『千の手 千の眼』法蔵館、1986年。なお、河合隼雄は「仏教と現代人の夢」(佐々木宏幹編『現代と仏教』春秋社、1991年所収)、239頁～42頁において、この夢を取り上げて考察している。

一体をみつめています。そこには阿弥陀如来や薬師如来、千手観音や地藏菩薩、その他いろいろの仏像が、手足の無いもの、頭や体部が割れているもの、それは哀れな姿となって、お互いが倒れようとする身体を、寄りそっているかの様子でした。私は無言で何百体かをみました。しかしその先には、まだまだ何百何千体といるように見えたのです。そこで私は、歩きながら、その仏像たちに次のことを言いました。

「あなた方は、私に修理をしてほしいなら、私を無事に帰国させて下さい」

ここで私は夢からさめたのです。隣の戦友は、私に寄りそうようにして、眠りながら歩いていました。何故か、心に安心感が沸き上がってきました。この時の仏像の姿と、何かわからないような喜びのような感情が今も忘れられません。

この後、西村師は中国の戦地で滞留していたわけであるが、その三年半の間、一度も敵兵に撃たれることがなくまた一発の弾も撃つことなく終戦を迎えて、昭和20年(1945年)に無事に帰国した。そして、それ以降、仏師、仏像修理師としての修行を積み、36歳のときに得度し、天台宗の僧侶となったのである。

これは単なる夢にすぎないと切り捨てることのできない、かなり意味深い内容もっている。まず戦地での身心の極限状態の中でのヴィジョンであることから、夢というよりは臨死体験に近いものではないだろうか。そのため、この体験自体が死の向こう側(死後の世界)に触れることで起こった心的現実であると言えるように思う。このことは、夢から覚めたときに、不思議な安心感や喜びに包まれていることから裏づけられる。また、夢の中での「無事に帰国させてほしい」という訴えの暗示が、外的な現実において奇蹟的に実現しているこ

とも、この心的現実が超越性を帯びたものであることを証している。そして、最も重要なことは、この夢における誓いが西村公朝師のその後の人生を決定づけている点である。彼は、この夢が暗示したように、破損した仏像を修復することに自身の生涯を捧げたのであり、まさしくこの夢を生きることによって、切り拓かれた人生であった。こうしたことから、心的現実が、人生最大の変容体験となり、死と再生を象徴するものになり得ると了解できるわけである。

さて、この夢を、先に見たナタリー・サドマンの臨死体験と対比してみると、「修復」というテーマに照らして考えるならば、二つの心的現実はちょうど対照的であることがわかる。一方はからだを修復される側であり、他方は仏像を修復する側となっている。ただ、どちらの場合も、複数の霊的な存在が登場して、それぞれの体験者に「修復」のメッセージを与える点では共通している。まず複数で出現する霊的な存在については、どのように解釈すればよいだろうか。心的現実が実在性をもつとすると、これらのヴィジョンもまた実在性をもっていると言えるだろう。何体もの仏像たちも、モノではなく人格を有した生命体であるように感じられる。アニミズムの世界観が示しているように、神仏の像に霊験が宿るというのも、唯物論的にはあり得ない話であるが、太古の昔から人々が本能的に感じてきた靈妙にほかならない。時代や文化は異なるとはいえ、ここにも元型的な共時性が見出せるはずである。ユング心理学でいう個性化過程を布置している自己(Selbst)元型は、一神教的に解釈すれば唯一のものであるが、これを多神教的に解釈して、無限に分化していく自己元型という存在形式もあり得るの

ではないだろうか。¹² 日本神道には分霊という考え方があるが、心的現実のあり方からすれば、複数に霊が分かれいくほうが自然なのであろう。それから、「修復」ということについてであるが、これは言うまでもなく、精神変容にとって重要な契機にほかならない。からだや仏像というのは、カタチの象徴である。霊性にはそもそもカタチがない。だからこそ、変化や変容のためには依り代としてのカタチを必要とする。カタチを通して、変容体験が起こること。これが「修復」に込められた深いメッセージであると思う。ちなみに、西村公朝師は、修復する側に立っており、変容体験からすれば能動的で違和感を覚えるものであるが、逆に考えるならば、仏像を修復するという作業を通して、常に自己が修復されているという反転が起きているわけであり、西村師はあくまでも仏の慈悲の媒介者であって、実は一貫して受動性の中に生きているとも言えるのである。

6. おわりに

ここ数年、大学で死生学の講義を受け持たせていただいている。この講義の中で「人は死んだらどうなると思うか」と聞いてみることがある。すると、「死んでも意識は続いている」、「死は終わりではない」と漠然と感じている学生が案外多いことに気づく。「無になる」、「何も残らない」と答える学

12. 西平直「元型が布置する一人生の分岐点」(『ライフサイクルの哲学』東京大学出版、2019年所収)では、自己元型を「変容という元型」として捉え、元型の中でもドミナントの機能をもつことに注目して考察をしている。その中で、井筒俊彦の「言語アラヤ識」の概念に触れ、元型イメージが起こってくる心の構造について明らかにしている。この問題は今後の課題としたいと思う。

生ももちろんいるが、そういう人であってもつっこんで聞いてみると「誰かの心の中に思い出として生きている」などの回答が返ってくる。自分が死後どうなるかよりも、他者の死をどう受け止めるのかという話に変わってくるのである。一方で、現代における「死後存続」に関する研究の成果、臨死体験や生まれ変わりなどに関する調査研究の内容を提示して意見や感想を求めると、多くの学生が「実感が湧いてこない」、「自分の思い描いている死後の世界はそういうことじゃない」といった感覚を抱くこともわかってきた。死後にも何らかの形で意識は存続すると考える人であっても、死後世界の様相を具体的に明示されてしまうと、とまどいを隠せなくなる。ここには、未知のものに対して、曖昧なままであるとそれなりに受け入れやすいが、それが具象化してしまうと途端に違和感をもったり関心が冷めたりする、といった心理がはたらいっている。そしてまた、これは日本人にありがちな傾向とも言えるのではないかと思う。

死後の世界についての心的現実、体験した者にとってそれはあまりにも生々しくその実在性を疑いようもなく感じてしまう。ところが、体験していない者からすれば、それはあまりに奇想天外で荒唐無稽であり、妄想かファンタジーのように思えてしまう。この断絶はどうしようもなく、溝を埋めることはまず無理だろう。イメージによって具象化された死後の世界は受け入れがたい。そうであったとしても、私たちは死後にもやはり何かは続いているはずだどこかで信じているし、何もかも無になるとは感じていない。心は脳の機能であり副産物だと考えている人であっても、それならば人間とはAI(人工知能)のような存在であり、精巧に造られた機械であると説明

されると違和感を覚えるのではないだろうか。果たして生命というのは、シンプルな数式によって説明し尽せるほど合理的に出来ているのだろうか。心の内に感じ取っている「私」という感覚は、本当に有機体の結合によって生じたものなのだろうか。生命や心というのは、考えれば考えるほど不可思議であり神秘的なものである。だからこそ私たちは、死後のゆくえについて考えるときであっても、どこまでも謙虚な姿勢で臨まなければならないのではないかと思うのである。宗教哲学者の故上田閑照先生は、死の向こう側の「何処か」について、ある随想の中で次のように述べている。¹³

13. 上田閑照「今しばし」(『哲学コレクションⅠ 宗教』岩波現代文庫、2007年所収)、14頁～15頁。

…本来その「何処か」(いずこ、いづく)は名づけることができない。実際にはさまざまな歴史的宗教がそれぞれに名付けているが、名付けてしまうと、知られたところとなり、人間の分別の網にかけられてしまう。大切なのは、私たちの世界が「この世」と感じられ、その感じに、同時に「この世」ならざる、死に逝くことによるのみ行くことのできる「いづく」が感じられていることである。

死後の世界について思索しようとするとき、心に留めておきたい言葉である。

さかい・ゆうえん
仁愛大学人間学部心理学科